「この子らの今と明日のハッピーを支える授業実践⑲」

―「できる・わかる・使える」学習指導の実践と考察（2）―

企画者　平間　俊二（北海道白樺高等養護学校）
市澤　豊　（星槎大学）
司会者　富山　聖子（北海道新篠津高等養護学校）
話題提供者　中村　章宣（北海道中札内高等養護学校）
清水　雅明（北海道雨竜高等養護学校）
指定討論者　太田　俊己（関東学院大学）
松井由紀夫（北海道手稲養護学校）

key words：ハッピー　できる・わかる・使える力　カリキュラムマネジメント

1【企画趣旨】

私たちは日本特殊教育学会第37回大会（1999年）において，「授業づくりからみた個別指導計画」をテーマとする自主シンポジウムを企画して運営以来19年間，「一人一人の子どもの成長・発達を支援する」という一貫した視点により教育実践に関する自主シンポジウムを継続してきている。

私たちが探究する教育実践とは，実効性のある教育課程の編成や指導計画による対人支援の授業実践とその実証であり，子どもの成長・発達の確かな実態像の追究である。

さて，本シンポジウムは，授業づくりのための「個別指導計画」をテーマとする実践研究から始まり，次に研究の視点を「子どもの豊かな生活支援」の追究へと絞り込み，「授業実践における個別事例研究」へと研究スタイルを深化させた。こうした研究の積み重ねの結果，私たちが目指す子ども（人間）像は，学校社会や地域社会において「人間らしく，その人らしく生きる」ことであり，この「自分らしさの実感」は子どもにとって「ハッピー」な状況であるとし，これまで事例とともに提案をしてきている。

昨年のシンポジウムでは，安心感の獲得や自己理解が進む変容が見られた事例，自ら進んで授業に取り組み，小さくても「できたの積み重ね」が「わかる・できる・使える力」となった実践について提起し，指定討論者からは「ていねいで創意ある連携的で粘り強い取り組み」がハッピーを生む道筋であるという一定の評価を得た。また，「できる」とは基礎・基本的知識を獲得し定着している力，「わかる」とはできることの意味を理解し科学的概念に発展する力，「使える」とは汎用可能な「できる・わかる」を駆使して創造的に取り組み解決する力とする『「できる・わかる・使える力」試論』を提示していただき，「授業実践を省察する確実なデータと資料の収集」が，教育実践科学に不可欠で必要であるとの示唆をいただいた。

こうした成果と課題を踏まえ，今回も引き続き「できる・わかる・使える学力を育てる学習指導」に視点をおいた話題提供を行う。要旨は後述の通りであるが，ひとつはカリキュラムデザイン，カリキュラムマネジメントの観点からの事例，もうひとつは，高等養護学校における子どもの成長と発達の追究の実証としての事例である。

前述のように本シンポジウムの実践研究は「個別指導計画」に始まり，次いで個別事例研究を中心に行ってきたが，今回は教育課程編成にかかわる検討へと「回帰」した。すなわち微視的実践研究と巨視的実践研究のサイクル的変換である。ここには，①これまで追究課題としてきた「できる・わかる・使える力」と次期学習指導要領の改訂で謳われている「子どもたちが身につけるべき資質・能力の三つの柱」が深く関連していること，更には②学校と地域の創生を願う「地域社会に開かれた教育課程」に関する提起をしたいとの背景と意図がある。

私たちが提案する「ハッピー」という概念やその姿は，ハッピー像が一人一人違うものであるが故に，安易な概念化や説明は控えているが，話題提供の中で浮き彫りされていく子どもたちの変容する実態像をとおして，私たちが追究し提案する「ハッピー」について参加者と議論したいと考える。

2【話題提供者の要旨】

(1) 村とつながる教育課程の編成～「中札内村連携学習」の実践～：中村章宣

人口4,000人弱の北海道十勝地方の農村にある職業学科を設置する高等養護学校における実践を報告する。

昭和58年の開校以来，生徒の社会自立と職業自立を促す教育活動を展開してきたが，開校35年をむかえ今後の教育の在り方や目指す姿について検討した結果，共生社会の理念をもとに「中札内村連携学習」の実践という方向性を示し教育課程に位置づけた。ここでは「学校で学んだこと，理解していること，できること」をどう使うか，また，「どのように社会に関わり，どのように生きていくか」といった主体的な学びに向かう力の育成を目指す，「地域とつながる教育活動」が中心となっている。

具体的には「地域参加」「ボランティア活動」「受注作業」「出前授業」の内容で，村内のスポーツ大会への参加や製品の販売会，除雪やビルクリーニングといった地域貢献活動，さらには作業製品の提供である。

学校は，こうした社会に開かれた教育課程を通して生徒一人一人の「職業観・勤労観の向上」「自己有用感の向上」「言語活動の充実」「地域の一員としての自覚」といった効果を期待している。前年からの取り組みであるが，「地域と学校が一緒に育てる」という視点に立った実践を生徒の様子や地域の理解などのエピソードを交えて話題提供をする。

(2) A男のできる・わかる・使える力の考察～作業学習の実践から～：清水雅明

北海道の空知地方に開校されて30余年を経た職業学科を設置する高等養護学校おけるA男への実践事例を報告する。

この高等養護学校には6つの学科が設置されており，A男は工業科3年生に所属して作業学習では主にコンクリート製品を製造している。中度の知的障害はあるが，父が建設の関係の仕事をしていることから入学当初より建設機械や土木工事現場に興味や関心が高かった。指導をしている清水はその興味関心からA男の持つ力を最大限を引き出したいと考えるとともに，本人の願いや希望は父の仕事（生き方）でありA男の幸せであるとおさえて指導をしてきている。

入学1年目は製品の知識や作業の手順といった学科の基礎を重点を置き，同時に自分の進路についても自身で考えさせながら学習を重ねた。2年生では外注による土木工事を行ったが，この工事で学校内で身につけた力，作業スキルやそれまでの学びの深さを確認することができた。大きな変容としては自分の行動への責任をもてるようになったこと，コミュニケーション能力が向上したことなどがあげられるが，A男の「できる・わかる・使える力」の視点から，これまでの成長や課題を整理するとともに，今後の学校生活の方向性についても話題提供する。

協働研究者：楢木正美，西田裕一，高橋早苗，早川道子，
吉村友里，中山明美，西川満，水野八重子，
蓑口真理，藤田昌子，二階堂愛莉
（HIRAMA.Shunji,ICHISAWA.Yutaka,TOMIYAMA.Seiko,SHIMIZU.Masaaki,NAKAMURA.Takanobu,OHTA.Toshiki,MATSUI.Yukio）